

西垣通著

『情報学的転回』 春秋社 2005年

仲田 誠

本書は、著者いわく「語りおろし」であり、平易な口調で全体が記述されている。しかし、内容は広く深く、それだけに読み終えるのに時間のかかる「難解な」著作である。しかし、この難解な本を読み終えた後の感覚は非常に爽快である。たとえていえば、今まで目の前をおおっていた霧がすっと晴れて目の前が良く見えるようになった感じに近い。霧が晴れた後に見えるのは、筆者（仲田）の見立てによれば、われわれを導く4つの道である。この4つの道はたどっていくうちにやがて、「情報学的転回」ということばで暗示される一つの大きな道に合流する。そこに行き着くことは、「生命」を内側から見ることができる境地への到達を意味する。

本書が出发点としてとりあげるのは、行きすぎた競争原理、効率至上主義、薄っぺらな拝金主義、人間のロボット化といった現象に象徴される「IT文明」の歪みである。こうした批判それ自体は必ずしも目新しいものではないにしても、こうした「歪み」の背後に、世界を唯一の視点で解釈しようとする一元論的世界観、「ユダヤ＝キリスト教的世界観」のひろがり（呪縛）を見抜く著者の視点は非常にユニークで示唆に富むものである。この一元論的世界観によって徹底的に毒されているのが今の日本の姿にほかならない。

こうした日本の惨状に心を痛める著者は、それを乗り越える方向性を提示する。それがさきほど述べた4つの道である。この4つの道とは、多元的な世界観をこの時代に取り戻すことの譬えにほかならないが、具体的には次のようなものの見方をこの世界に取り戻すことを意味している。1) 意味の生成・創造。「ユダヤ＝キリスト教的一神教」に支えられた世界観では、神の視点が絶対的なものとされるが、これは世界を固定的なもの、既にできあがったものにとらえる視点につながる。それに対して著者が重視するオートポイエーシスとは、世界はつねに新しく意味が創造される場だという考えにつながるものである。2) 多元的な「聖性」の復権。著者によれば、世界を客観的なもの、実体論的なものとしてとらえる視点がじつは、すでに「ユダヤ＝キリスト教的一神教」を背景とした、ある種の「聖性」をおびた考えである。著者はこれだけが唯一の「聖性」であることを肯定しない。3) 多元的な「情報」観。実体主義的なものの見方に対するものとしての「関係性」の重視、生命を「外」からではなく、「内」から見る視点は、新たな「情報」観の可能性につながる。4) メディアへの新たな注目。この点は理解がなかなか困難だが、「コミュニケーション」相互の関係性を重視する（『基礎情報学』）著者の理論が根底にあることは確かである。

「情報学的転回」への志向性を根本から支えている動機ないし姿勢、つまり、一元論的世界観からの脱却の試み、同時に、価値相対主義的な迷路（ニヒリズム）に陥ることを避けようとする姿勢には、筆者（仲田）も、全面的に共感するのだが、ただ、一つ、疑問点を提起すれば

(疑問点というか、筆者の関心から発した自問自答)、著者が重視する生命論的情報学(著者は、情報とは生命体と対象との関係概念だという)では、生命、「生」の意味について連続的、一元論的に考えているのだろうかという点である。著者は「生命を内側から見る思想」の源泉(の一つ)としてユクスキュルに言及するが、木田元(『ハイデガーの思想』)に言わせれば、ユクスキュルの思想の中には、「脱生命論」的なものの見方が含まれている。それは、シェーラーの「生の超越」、ハイデガーの「世界内存在」(さらにはデリダの差延)という思想につ

ながるものである。人間は生物であるが同時にそれを「超越」している、環境と人間という生物の間には「空隙」があるという考えがそこから生まれる。木村敏など(フロムも)は、その「空隙」があつてこそ、イメージ=構想力によって開かれる新たな意味の世界の展開や「脱自己中心」的生のありかたが人間において可能になったと考えるのである。

著者は「聖性」という観点をとりあげることによって、すでにその新たな「空隙」的な意味の領域にも踏み込んでいるように思えるのだが。



仲田 誠 (なかだ まこと)

1954年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学

【専攻領域】メディア論、情報社会論、情報倫理学

【著書・論文】

『世界は常識と想像力でできている—あるべきことの情報学』(砂書房, 2003)

『情報社会の病理学』(砂書房, 1997)

Nakada, Makoto: 2006, The Internet within *Seken* as Old and Indigenous World of Meaning in Japan, in J. Fruebauer, R. Capurro and T. Hausmanninger (eds.), *Localizing the Internet. Ethical Issues in Intercultural Perspective*, Fink, Munich.

Nakada, M. and Tamura, T.: 2005, Japanese conceptions of privacy: An intercultural perspective, *Ethics and Information Technology*, 7(1), 27-36.

【所属】筑波大学大学院人文社会科学部研究科

【所属学会】日本社会情報学会